

【東京】池袋でホームレス支援20年、クリニックで医療サポートも-森川すいめい・ゆうりんクリニック医師に聞く◆Vol.1

2022年7月15日（金）配信 m3.com地域版

生まれ育った池袋で20年間、路上生活者の支援活動を行う精神科医がいる。「ゆうりんクリニック」（豊島区）の森川すいめい氏は炊き出しの参加や医療相談対応を皮切りに、さまざまな活動を展開してきた。団体を立ち上げて行政との連携を進め、医師としては精神的な問題を抱える元ホームレスの人をサポート。現在は日本のホームレス対策への疑問から「ハウジングファースト」を掲げて活動を進める。（2022年5月31日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——森川先生は長くホームレスの人の支援活動を行っていると聞きました。

日本大学医学部の学生だった2001年の12月31日、ある支援団体が新宿中央公園で行っていた炊き出しに参加したことがきっかけです。その半年後くらいから私の地元である池袋での活動にも参加し始め、以来、週に1回池袋、月に1回新宿という形で炊き出しに参加したり医療相談に乗ったりしてきました。当時は地域に根差した支援団体が池袋になかったので、仲間たちと2002年に団体を立ち上げて翌年に「TENOHASI」と命名し、2008年にNPO法人化しました。



森川すいめい氏（本人提供、©百代）

——現在は複数の団体に関わっているそうですね。

徐々に私たちの活動に賛同してくれる人が増えて規模が広がり、TENOHASIは今、「ハウジングファースト東京プロジェクト」という事業を母体とするコンソーシアム（団体連合）の一つとしても機能しています。このプロジェクトは、夜回りや炊き出し、生活サポートを行うTENOHASIなど七つの団体から成り、私はこのうちTENOHASIと認定NPO法人「世界の医療団 日本」（港区）、一般社団法人「つくろい東京ファンド」（中野区）の理事を務めています。精神科医として勤める「ゆうりんクリニック」（豊島区）もコンソーシアムの一つであり、こちらでは元「ホームレス」の人への医療サポートを行っています。

——取材日現在では「みどりの杜クリニック」（板橋区）の院長を務めています。

2014年から法人に雇用される形でみどりの杜クリニックで院長を務めており、精神科での外来診療や在宅医療を行っています。ゆうりんクリニックは医療者の仲間と2016年に開設した医療機関であり、当時から有償ボランティアと

して週に1回診療しています。今後はこちらでの診療に力を入れようと考えており、2022年7月末でみどりの杜クリニックを辞め、8月からはゆうりんクリニックに常勤医として働く予定です。

同院は内科と精神科を標ぼうしており、在宅医療も行っています。患者さんは先述の通り元ホームレスの方々であり、うち95%が一人暮らしです。まれにご夫婦や親子連れもいます。同院は私の常勤化によって常勤医師2人、非常勤医師2人、心理士や精神保健福祉士など計19人の体制になります。仕事が多いのでスタッフがもっと増えてほしいですね。

——TENOHASIの開設にはどんな狙いがあつたのですか。

ホームレスの方の医療受診や暮らしをサポートしたい思いがありました。新宿区では当時、住まいがなくても医療を受けられる制度が施されており、支援団体が行政とホームレスの方をうまくつないでいました。例えばホームレスの方が病気になったとき、団体の医師の紹介状を福祉事務所に持参して相談すれば、受診できました。一方の豊島区では住所がないと生活保護を利用できなかったため、ホームレス状態だとすぐには医療を受けられませんでした。施設に入って住所を得、生活保護を受けてから医療受診という流れであり、こうした仕組みや施設入所が前提になるホームレス対策に疑問を感じました。そこで、支援内容の充実や行政との連携・交渉を図ろうと団体開設を考えました。

——先生と同じくホームレスの人の支援活動を行う渡邊貴博先生（詳細は「【愛知】元ホームレスや元受刑者も訪問して医療サポート行う精神科医-渡邊貴博・鶴舞こころのクリニック院長に聞く◆Vol.1」を参照）も施設収容が前提となる国の対策に疑問を感じていました。

私が活動を始めた当初、ホームレスの人が収容される施設はプライバシーがなく、劣悪なところが多い印象でした。二段ベッドが並ぶ20人部屋で虫がたくさんわく、食事の提供は1日2回で門限は夕方の5時、真夏でもエアコンの使用は制限され、お金の管理は自分でできず施設に委ねられる——。こういった環境が多く、何というか、「人間扱いされていない」と感じていました。生活保護を受けるために人間らしさを失うばかりではありません。ホームレスの方は精神的に何らかの問題を抱えており集団生活になじめない人も多く、施設を途中退所するケースが少なくなかったです。「そんな環境で過ごすなら路上のほうが自由」。そう話す人もいました。

TENOHASIが2009年、池袋で路上生活を送る164人に行った調査では、41%が精神疾患（アルコール依存症19%、うつ病15%など）を抱えており、34%に知的障害が疑われました。また、ゆうりんクリニックに訪れる元ホームレスの患者さんの中には幼少期に虐待を受けるなどしてトラウマを抱えている人もいます。このような人たちがいわゆる「社会」になじめなかった結果、路上生活を送っている側面もあります。

——そうした背景や問題意識がプロジェクト名の「ハウジングファースト」につながっているのでしょうか。

はい。ハウジングファーストとは、ホームレスの方への支援において「安心して暮らせる住まいの確保」を最優先する考え方です。1990年代にアメリカで始まり、欧米のホームレス支援の現場では一般的になりつつあります。ハウジングファースト東京プロジェクトはこの考え方を日本に浸透させていきたいと、各団体がそれぞれ大切な役割を担っています。一例として、TENOHASIとつくろい東京ファンドが協力し、市民からの寄付を活用して民間アパート約50部屋を借り上げ、ホームレスの方に提供しています。

◆森川 すいめい氏

1996年に明治国際医療大学を卒後、鍼灸院を開業したのち日本大学医学部に入学し、2006年に卒業。精神科医として久里浜医療センターや陽和病院に勤務、みどりの杜クリニックでは院長を務める。2001年からホームレスの人の支援に携わり、さまざまな活動を展開。2022年8月からは「ゆうりんクリニック」の常勤医として元ホームレスの人を診療する。支援団体「TENOHASI」「世界の医療団 日本」「つくろい東京ファンド」理事。

【取材・文=医療ライター庄部勇太】

※本記事を配信したメールマガジンにおいて「池袋のクリニック院長」と明示しましたが、正しくは「池袋のクリニック医師」でした。お詫びして訂正いたします。

記事検索

ニュース・医療維新を検索

